

## 利用者の「心の玉手箱」にいちばん近く それを開けることのできる唯一の存在に!



高室 成幸さん

ケアタウン総合研究所 代表  
ケアプラン評論家

日本福祉大学社会福祉学部卒業。ケアマネジャーや地域引揚支援センター・介護施設の管理者等に研修を行う。近刊に「利用者・家族に伝わるケアプランの書き方」他著書多数。認知症サイト「なまある」に「申せケアプラン」を連載中。

認知症の方を支援する場合、訪問介護において悩ましいのはケアマネジャーとの連携だ。ケアプランに基づき、訪問をスタートしてから、実際に得る気づきをどうフィードバックするか？ よりよい支援に向けて何を伝えるか？ ケアマネに向けた多くの研修の講師を務める高室成幸さんに認知症のある方のケアプラン作成のポイントとケアマネとの有機的な連携について伺った。

### 認知症の利用者へのケアプランは 一歩踏み込んだアセスメントを

ケアマネジャーが認知症の方のケアプランを作成する際にとりわけ重要なのが支援の方向性と支援内容です。どの利用者にも行うべき項目のアセスメントから、さらに一歩踏み込んだ働き取りが必要で。

例えばADL面では、移動の際の転倒、徘徊や帰宅願望、迷子になったりしないか、食事なら偏食、繰り返し要求、異食の有無、入浴の頻度、拒否がないか、どの程度洗えているかは把握してほしい。排泄ならは尿意・便意や尿失禁・便失禁の有無と自覚、そして始末ができていないか、睡眠では昼夜逆転、深夜に目覚めて起きたままではないかなどです。

ADL面では、買いためていないか、金銭管理ができるか、買いつけの支払いを忘れることはないか。料理の手順が混乱したり回数そのものが減っていないか。更衣の手順に混乱がないか、同じ服を着たままだったり、汚れたものを着ていないか、散らかり放題でも平気ではないかなど。

「コミュニケーション面も大雑把に」できるか、「できないか」でなく、会話が成立するかどうかのように聞いているか。言葉が通じないか、文字が読めるか、書けるか、が重要です。これらを踏まえて「ご本人ができること、できないこと」が整理できたら、次に支援をどう行うか、それを利用者や家族、関連職種に伝わるケアプランにとだけ「文章化」

アウトプット」できるのが力となります。まずは利用者本人ができていないことをどうやって維持・継続できるか、自立支援の視点で「やりやすさ」が工夫されているか。

家族支援では介護が初めてという人も多いので、利用者のADLをサポートするだけでなく、介護の仕方をサポートしたり、さらに家族の体形や体力にあった助動方法を一緒に考案することをお勧めしたいです。

先々のリスクマネジメントにもつながる生活上の細かいリスクを見逃せるのが、サウヤヘルパーの皆さんです。月1回しか利用者との面談しないケアマネにはディテールまでわかりませんが、利用者のリアルな情報を伝えることがケアプランのブラッシュアップにもなります。

### 「本人らしさ」を尊重するCADL理論 暮らしの中の「心の玉手箱」に着目

次にお伝えしたいのが認知症の方への訪問介護計画書作成に際して大切なアセスメントの視点です。

第一に「安全面」に関係し、家庭内事故にもつながるリスクアセスメントです。転倒・転落、火傷の危険性についてよく確認すること。そして清潔な環境を担保する意味で「ゴミ屋敷化する兆候はないか。さらに屋外の周辺環境についても把握が必要です。ふだんの散歩コース、よく行くなじみの店やコンビニの場所、そして川や側溝、ため池の有無など危険な箇所や災害時の注意箇所などが見える化

できる周辺マップを作るとよいでしょう。

第二に「心の安心」につながる落ち着ける環境です。その方にとって心地よい暮らし方つまり「自己流・自分流」を知ることです。

例えば、玉子かけご飯は黄身だけがおいしく、お寿司はカツパキから食べたい、洗身や、洗面の順番等々一人によってこだわりが違います。これらを丁寧に「これまでの暮らしの目録」で見えて尊重する、それができるのが訪問介護です。認知症ケアにとっては忘れてはならない大事な視点で、そこが尊重されない本人には「不快感」しかもたらしません。

私は、15年前から、「その人らしさ」という言葉よりも「本人らしさ」「自分らしさ」という言葉を重視し、「CADL」という考え方を提唱してきました。「C」はカルチャーで、「A」は「文化的日常生活」と呼んでいます。

「C」は、その人にとっての楽しみや趣味や役割。「歩けるようになりましょう」「お風呂に入れるようになりましょう」だけでは「何のために？」がありません。お芝居を観に行くため、好きな歌手のショーを聴きに行くため、銀座に行ってお茶を飲んで、お気に入りの店で買い物をするため、そういう行動機つけこそが「自分らしさ」の実現に結びつきます。好きなこと、やりがい、生きがいのヒントが随所にちりばめられているのが「暮らしの場」。その意味でもサウヤヘルパーの皆さんは利用者の「心の玉手箱」にいちばん近いところにいて、それを開けることができ唯一の存在です。